

第1回青函共用走行区間技術検討 WG の概要

平成 24 年 7 月 12 日(木) 17:00~18:30

於: 4階幹部会議室

○議事「(1)青函共用走行区間技術検討 WG の進め方について」

(小澤委員)

- ・ 中長期的な対応として、技術開発の可能性等について民間に提案してもらい、対話しながら進めて行く方法も考えられるが、どのような想定をしているのか。
- (潮崎施設課長)対応策の方向性を技術提案で決めていくというのは想定していない。
- (家田座長)今の状況は、大まかな方向性を定める段階と認識しているが、方向性が定まってから、技術開発等について検討する段階においては、民間の提案は重要なのではないか。

(岩倉委員)

- ・ 短期的な対策と中長期的な対策は連動すると考えられるため、短期的方策を2, 3ヶ月で決定した後に中長期的方策を議論するのは、それが制約条件となってしまうため違和感がある。
- (潮崎課長)方策を決め打ちする必要はないが、短期的方策に可能性があるものが出てきた際には、早めに準備を行いたいと考えている。
- (家田座長)様々な方策の中から、短期に実施可能な案と中長期で実施可能な案に仕分けし、その後に短期的方策の議論を深めていくものと理解している。

(水間委員)

- ・ 新幹線と在来線が直接すれ違わないのであれば、新幹線が 260km で走行することを許容する前提という理解でよいか。
- (潮崎課長)委員の見解のとおり。
- ・ 新幹線は 140km/h を前提にしているが、150km/h や 160km/h に速度向上させる検討も行うのか。あるいは、在来線の速度向上も含むのか。
- (潮崎課長)140km/h 以上で貨物列車とすれ違った実績がなく、検討が難しい。
- (水間委員)事務局と同意見。短期的方策としては、前例のないものはリスクとして大きい。そのため、検討の前提から省いて整理すべき。

○議事「(2)青函共用走行に関するこれまでの検討及び論点について」

(須田委員)

- ・ 各方策の優劣を判断するため、メリット・デメリットを検討してはどうか。
- (潮崎課長)次回以降対応する。

(永井委員)

- ・ 新幹線と貨物列車が並行して走行する場合にどのような事故が想定されるのか。トラックで発生しているようなコンテナの片荷や重心が高いことによる転覆事故は貨物列車では起きていないのか。貨物列車に起因する問題は起きていないのか。
- (潮崎課長)積み荷が原因というよりは、貨車の車軸の焼損や運転取扱に起因する事故がほとんど。
- (家田座長)青函トンネルでは、特急列車を140km/hで、貨物列車を100km/hで二十数年もの間、無事に走行してきた実績がある。この範囲であれば、今までよりもメンテナンス状態のいい新幹線が、しかも標準軌で走行するため、この条件であれば問題ないという考え方がスタート地点にあるが、ここを新幹線が140km/hのまま走行させるのはもったいない。このように理解すべき。

(中村委員)

- ・ 貨物列車とすれ違い時のみ減速させる案については、どのくらい効果があるのか、減速時に発生する遅れが上りや下りに影響しないのか。また、同一方向に100km/hと260km/hの列車が混在することの影響を調べる必要があるのではないか。
- (潮崎課長)すれ違い時の減速について、すれ違い時のみ減速すれば解決するのかという点も含め、その効果等について検討したい。
- ・ トレイン・オン・トレインについては、札幌まで走行することも検討してみてはどうか。
- (潮崎課長)将来の速度向上を考えた場合、札幌まで走行させるのは難しい。

(小澤委員)

- ・ 方策のメリット・デメリットを検討する際は、安全性の観点も重要。目標とすべき安全性のレベル、例えば現状と同じだけの安全性を確保できるかどうかチェックすべき。
- (潮崎課長)当然検討すべき事項であり明記する。
- ・ 新幹線と貨物列車の事故の発生率について、事故の発生原因はどこにあるのか。
- (潮崎課長)新幹線と在来線との大きな違いは踏切の有無であり、踏切に起因する事故が相当ある。

(岩倉委員)

- ・ 海峡部分は船で貨物を輸送するという案を検討する必要はないか。
- (潮崎課長) 青函航路がなくなってから二十数年経っており、ノウハウがないことやコスト等を考えるとなかなか検討が難しい。
- ・ 青函トンネルは完成後相当年数経過しており、改修に多くの費用を投資する必要があるのかどうか把握する必要があるのではないか。
- (潮崎課長) 十数年後には大規模改修が必要な状況になる可能性もあり、そういう状況も想定する必要がある。

(永井委員)

- ・ 安全目標とそのチェックをどのように実証していくのかしっかり検討する必要がある。
- (家田座長) その方策が現状非悪化かどうか、チェックをどのように行うか検討が必要。
- (水間委員) それぞれの方策について、リスク評価の概念を取り入れればよいのではないか。時間短縮効果や貨物輸送量が減少するリスクなども含め、一元的に指標化できればよい。
- (潮崎課長) 今後検討させて頂きたい。

(家田座長)

- ・ どのような現象を危険な現象と想定するのかを明確にすべき。

○その他

(潮崎課長)

- ・ 今回のご指摘を踏まえ、次回は鉄道事業者も含めた形で開催を検討したい。

(了)